



勉強と学問

●●くんから「プログレス現代文完成編」の評論1に関する質問があったので目を通してみたが、入門の問題としてはなかなかイイ題材である。そもそも著者の小坂井敏晶さん（社会心理学者）の文章が、数年来よく入試に採り上げられるようになっていて、君たちが使った「国語総合」の教科書にも「主体という物語」という文章が載っている。授業では扱わなかったが、興味のある人は評論1の問題のあと、併せて読んでみるとイイだろう。

さて、その文章を要約すると…というのは、実際に要約の練習をする人がたくさん？いるだろうからやめておくが、言語と同じで、我々は「色メガネ」をかけて現実を認識していることを指摘した文章である。その中に、大学の新生は高学年の学生に比べて教えにくいという話が出てきて、その理由が、「(新生は)常識と呼ばれる知識すなわち偏見に彼らは縛られていて、既存の常識に反する講義内容が浸透しにくいからだ」という分析が述べられている。

実は、同じようなことが書かれている文章をつい最近読んだ。ちょっと引用しよう。

*

大学に入ったとき、はじめて勉強から解放されたと感じた。(中略)それは、苦手だった数学や理科に時間を費やす必要がないという喜びもその一因であったけれども、何よりも、大学の授業は、「自分で答えを見つける」という愉しさがあることを実感したからであった。「勉強」は、すでに「先人が見つけた答え」を、習い、覚えることである。例えば、「三平方の定理」を利用して数学の問題を解いたり、過去の助動詞「き」と「けり」の違

いを覚えて古文を訳し分けたり。だが、大学の授業は、そのような定理・定説そのものを根本から疑い、検証し、新しい答えを自分で見つけるものであった。私はこれを、「勉強」と区別して「学問」と呼びたい。

(川平敏文、九州大学准教授、近世文学)

*

個人面談を通して現在の第一志望を確認し、それが決まっている人には、これから力をかけてやるべきことをアドバイスしたが、一方で、まだどの学部を目指すのか、はっきり決められないでいる人も何名もいた。そう！何名もいたから、その悩みを持っている諸君は不安になることはない。選択肢が増えているし、君たちの実力ならその選択肢のどれでもを選択することが可能なのだから、逆に悩みも深いということなのだろう。

しかし、受験に際しては学部が決まっていることは必要だ。だからこそ、当たり前だが迷っているならとりあえず「好きなこと」で決めるしかない。本が好きなら文学部だろうし、物作りが好きなら工学部や服飾系、手先が器用なら医学部、花が好きなら理学部か農学部、デザインが好きなら芸術メディア系、音楽が好きなら芸術系だけでなく、音響工学が学べる研究室といったところか。

今はまだ想像できないかも知れないが、好きなことを学びに大学に入れば、その先に広く豊かな「学問」の世界が広がっているはずである。そして、その世界に触れるためには、まず「好きなこと」から始めるしかないだろう。大学卒業後…などといった雑音を廃して、一度基本に立ち返って考えてみてはどうか。